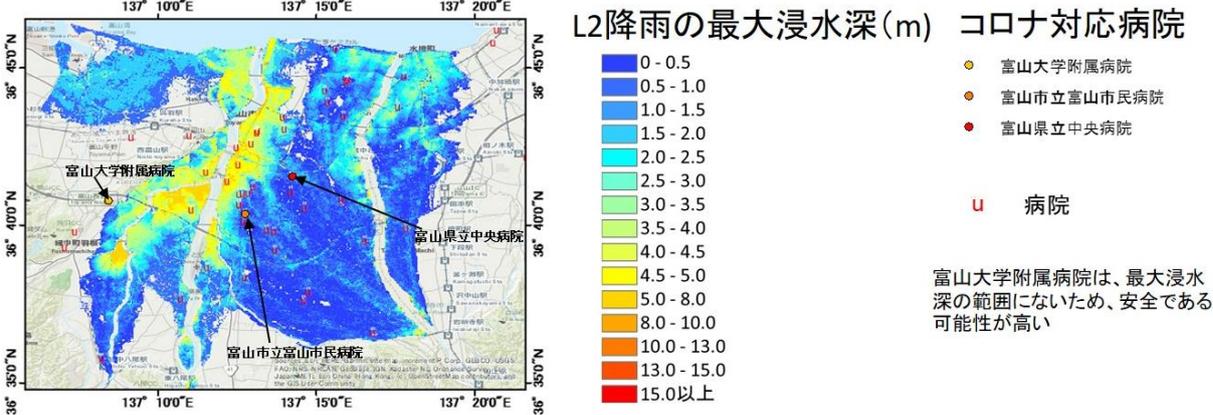


研究課題 (テーマ)		最先端・高次元の洪水・津波解析モデルに基づく新型コロナウイルスと水災害の複合災害リスク評価 ～水災害への適応策「富山モデル」の提案～		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	環境・社会基盤工学科	准教授	呉 修一	
分担者	なし			
研究結果の概要				
<p>新型コロナウイルス (以下、コロナ) の蔓延で我々の生活が激変している。現在の感染状況で自然災害が生じた場合、医療崩壊が加速的に生じる恐れがあり、避難所がクラスター感染の源となりえる。よって、事前に病院などの水害リスクを評価し感染症蔓延下での避難所の設立・運営方法を見直す事が重要である。まず、コロナ対応病院 (富山大学付属病院, 富山県立中央病院, 富山市民病院) およびその他病院の立地状況と想定最大規模の最大浸水深の空間分布を以下に示す。浸水深は代表者らの洪水氾濫解析結果および国交省の想定最大規模水深を用いて検討を行った。</p>				
 <p>L2降雨の最大浸水深(m) コロナ対応病院</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 富山大学附属病院 ● 富山市立富山市民病院 ● 富山県立中央病院 U 病院 <p>富山大学附属病院は、最大浸水深の範囲にないため、安全である可能性が高い</p>				
<p>コロナ対応病院は、想定最大規模の洪水氾濫を対象としても、浸水深の小さい箇所に立地しており、これら病院の水害リスクは比較的小さいと考えられる。よって、水害によって直接的にコロナ対応病院が麻痺するなどの影響は生じないと考えられるが、その他の交通や電気、水道などの社会インフラや水害時の避難所などは別途評価する必要がある。</p>				
<p>次にコロナ禍での災害時の避難所の運営方法であるが、既に多くの提案や指針が出されている。これらをレビュー・整理すると、自宅療養者、濃厚接触者、発熱などの症状がある人、特定避難者 (高齢・基礎疾患、障害者、妊婦など) の隔離、分離が重要である。滞在スペースの振り分け、レイアウトの工夫、動線、行動スケジュールの区別などで、隔離を徹底することが大事となる。また従来よりも衛生環境対策品の確保が必要となり、健康チェックリストの作成・記入など追加の対応も必要である。また避難所で感染疑いが生じた場合の対応・連絡・運搬方策もまとめて整理しておく必要がある。これらの詳細は、報告書として研究室HP (呉研究室 or 河海工学研究室 で検索) で公開し、R4年度富山県立大学紀要文にも投稿予定である。</p>				
今後の展開				
<p>今後は、民間企業・事業所や病院を対象とした水害・コロナ版 BCP (Business Continuity Plan) の策定を進めていく。そのために水害・コロナ被害額の算定と B/C による各種対策の費用対効果での評価を行うことで、事前の準備の重要性を定量的に明らかにしていく。また、実際の避難所の運営事例で生じた課題や良い対応例、地震・津波などの対応、BPC 事例などを、文献調査や県内企業・病院関連へのヒアリングを通じて収集し、公表していく予定である。</p>				